



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

博多の歴女 しらこまひとみ 白駒妃登美

時は戦国時代、抗いようのない宿命を懸命に生ききった一人の女性がいました。細川ガラシャ。彼女の本名は「たま（玉、あるいは珠）」ですが、ここでは広く知られた「ガラシャ」の名で紹介しましょう。

ガラシャの父は、あの明智光秀。数え年十六歳の時、丹後国（現在の京都府北部）宮津城主だった細川藤孝の長男・忠興に嫁ぎ、一男一女をもうけます。同い年の忠興は、若いのに戦上手で政治力も抜群。美貌のガラシャと二人が並べば、絵物語の主人公のようなまばゆさを誰もが感じました。

織田信長が天下をめざす過程で政略的に結ばれた二人でしたが、夫は妻を愛し、妻も夫を懸命に支え、着実に愛を育んでいきました。ところが、幸せなその暮らしも、ある大事件によって突然終わりを告げます。

❁ 戦国の世に生を享けて…

—— 戦国の宿命に生きた細川ガラシャ

散りぬべき時 知りてこそ

❁ 人生の光となった デウスの教え

天正十（一五八二）年六月、光秀が突如、謀反を起こし、主君の信長を襲撃しました。本能寺の変です。これ以後ガラシャは「逆臣の娘」という汚名を着せられることとなります。信長に忠誠を誓ってきた細川家から、離縁されてもおかしくない状況でした。

ところが忠興が選んだのは、離縁ではなく、ガラシャの幽閉でした。忠興は、普段から妻が他の男の目に触れることさえ嫌がり、彼女に見とれた植木職人を手討ちにしたという逸話が残されているほど、深く妻を愛していました。細川家の体面と妻への愛の板ばさみで、忠興も苦悩したのではないのでしょうか。それはまた、ガラシャも同じ。幼児と離れ孤独感に苛まれる暮らしは、身を切られるほど辛かったでしょう。およ



細川ガラシャ (1563-1600) 明智光秀の次女、細川忠興の妻。本名は玉子。宣教師によりヨーロッパに伝えられたガラシャの生きざまはオペラとなり、ウィーンで初演された。

【イメージイラスト】
アオジマイコ